

フッサールにおける志向の充実化について

福島裕介

はじめに

フッサールは現象学的認識論を「志向の充実化 (Erfüllung der Intention)」という枠組みの下で展開した。認識を志向の充実化として捉える発想は、現象学の出発点となった著作『論理学研究』において表明され(XIX/2,540)⁽¹⁾、その強調点や特徴付けを変化させながらも、彼の後年の思索に至るまで保持され続けた。本稿の目的は、志向の充実化として捉えられる認識概念が、フッサール現象学の進展とともにどのように変遷していったのかを主に『論理学研究』と『イデー・I』に即して明らかにすることである。

本稿の立場を明らかにするために、以下ではまず、フッサールの「ノエマ」概念をめぐる行われた数多くの論争の原因について論及したベルネの論文を手がかりにしたい(1)。そこでは、意味論的研究と認識論的研究という現象学の二つの道が確認される。続いて、本稿では後者の認識論的研究の歩みを跡付けることに目標を定め、志向の充実化という分析の枠組みが初めて示された『論理学研究』を取り上げて考察を行う(2)。そこでは認識概念と充実概念の特徴付けに問題が存在していることが確認されるが、その問題は『イデー・I』の現象学的認識論の枠組みにおいて一定の解決を見ることを示す(3)。

1. 現象学の二つの道

超越論的現象学の誕生を告げる著作『イデー・I』においてフッサールが提示した「ノエマ」概念をめぐるのは、これまでに多くの議論が行われてきた。ノエマをめぐる論争は単純にある概念をめぐる解釈上の争いに留まるものではない。ノエマ概念に対する理解は、「志向性」に関する理解と密接に結びついており、更には現象学そのものに対する理解をも規定するものであった。ベルネは1990年の論文「フッサールのノエマ概念」において、ノエマ概念をめぐる二つの解釈の代表者としてマッキンタイアールとソコロウスキーを取り上げ、両解釈の対立は「フッサール現象学の行く末をめぐる議論」であると述べる(Bernet, 1990, p. 62)。以下でこの両者の対立とそれに対するベルネの主張について見ていきたい(ベルネの論述はいささか簡潔に過ぎるので適宜それを補足する)。

『イデー・I』において、ノエマは私たちの志向的作用に対する「志向的相関者」として導入された。ノエマ論争の嚆矢となったのは、1969年のフェレスダールの論文である。

フェレスダールは、このノエマないしノエマの意味が「内包的な (intensional)」存在者であることを強調し、さらに「ノエマの意味は、そのおかげで意識が対象へと関係するところのものである」と述べる。フェレスダールは作用が向かう対象と区別される抽象的な存在者としてノエマを規定し、ノエマこそが作用を志向的にする当のものであると主張した。フェレスダールはまた、フレーゲの「意義 (Sinn)」概念とノエマとの類似性を見て取っている(Føllesdal, 1969, pp. 681-682, p. 686)。この解釈はD.W.スミス、R.マッキンタイアーらに引き継がれる。こうした解釈は、現象学についてのいかなる理解を帰結するのだろうか。ベルネによれば、こうした解釈を採るマッキンタイアーにとっての現象学の課題とチャンスは、フレーゲの意味論、あるいは可能世界意味論との連関において、現象学を展開することにある(Bernet, 1990, p. 62)。

こうした解釈に反対するのがソコロウスキーである。ソコロウスキーによれば、フェレスダール流のノエマ解釈は「ノエマについてだけではなく、フッサールの志向性概念、超越論的還元、またフッサールの哲学についての考えに対する誤解もまた示している」(Sokolowski, 1987, p. 524)。ソコロウスキーにとって、ノエマは作用と対象との間の媒介者ではなく、超越論的還元において見られた限りでの対象のことである。また、意識はノエマという装置のおかげで志向的になるのではない。フッサールの意図はむしろ、志向的関係を記述することであり、超越論的還元において開かれた客観と主観、ノエマとノエシスとの間の相関関係に焦点を当てることにある(Sokolowski, 1987, p. 527)。ベルネの診断によれば、ソコロウスキーにとっての現象学の課題とは、「所与存在の可能性の条件をその様々な形式において研究すること」(Bernet, 1990, p. 61)にある。

このように、ベルネはノエマ解釈をめぐる対立を現象学の行く末として描き出す。そして、ベルネは『論理学研究』(1900/01)から『イデーニ I』(1913)に至るまでに行われたフッサールの講義録の読解を通じて、「意味理論 (Bedeutungslehre)」と「認識論 (Erkenntnistheorie)」という二つのモチーフがフッサール自身のうちに存在しており、その両者においてそれぞれ別の仕方でもノエマ概念が導入されていたことを確認する。ベルネによれば、こうしたモチーフを区別することなく『イデーニ I』においてノエマ概念を導入したことに上記の論争の原因があったのである。現象学にはもともと意味理論と認識論という二つの道が存在していた。

残念ながら本稿ではベルネの論究の詳細に立ち入ることはできないし、これまでのノエマ解釈をめぐる論争の細部に分け入ることもできない。むしろ本稿が目指すのは、現象学における認識論の道を再検討することである(本稿におけるノエマ解釈はソコロウスキーの立場に近いものとなるだろう)。以下本稿では、『論理学研究』および『イデーニ I』で

のフッサールの叙述に即して、志向の充実化としての現象学的認識論の内実を検討する。そして、その上で本稿の最後に再びこの現象学の二つの道という論点に立ち返りたい。

2. 『論理学研究』における意義志向と意義充実化

既に述べたように、現象学的認識論を再構成するに際して、本稿が手掛かりとするのは志向の充実化という問題設定である。『論理学研究』において、この問題設定はいかなる文脈において登場することになるのだろうか。『論理学研究』第二巻は「認識の現象学と認識論のための諸研究」と題されている。私たちはその序論のうちに、同書同巻における二つの課題を見て取ることができる。第一の課題は、同書第一巻と密接に関連している。フッサールは第一巻で、論理学を心理学によって基礎付けようとする心理学主義などに対抗しつつ、「学問ないし理論一般の可能性の理念的条件」(XVIII, 238)を問う「純粹論理学」の一般的構想を提示した。『論理学研究』第二巻の第一の課題は「論理的諸概念、すなわち諸概念および諸法則を、認識論的に明晰判明にする」(XIX/1, 9)こととして規定される。

妥当な思考単位としての論理的諸概念は直観⁽²⁾のうちにその起源を持たなければならぬ。それらは何らかの体験に基づく抽象によって成立せねばならず、この抽象の新たな遂行において絶えず再び立証され、その自己同一性において把握されるべきものである。換言すれば、私たちは《単なる語》、すなわち単に記号的な語の理解だけでは到底満足できないのである。(ibid., 10)

こうして、「意義志向」と「意義充実化」という問題設定が登場する。論理的諸概念は、確かに「単に記号的な語の理解」(＝意義志向)によっても把握され得るが、ここには常に多義性による危険が潜んでいる。この多義性を避けるために、私たちは「再生可能な直観(ないしは抽象の直観的遂行)との照合を十分に繰り返すことによって、意義⁽³⁾を全く同一的に確保する」(ibid.)必要がある。『論理学研究』における志向の充実化という問題設定は、第一に〈論理的諸概念の明晰判明化〉という課題のもとで登場してくるのである。

さて、フッサールによれば、この第一の課題は「種々の認識論的な根本問題」(ibid., 12)と密接に関連している。フッサールはここで、「いかにして客観性の「自体」が表象され、いわば再び主観的なものとなるのか」という古典的な認識論的問題を一例として挙げている。志向の充実化という枠組みにおいて論理的諸概念の解明を目指す現象学的分析を通じて、私たちの認識体験の基本的構造もまた明らかになるというわけである。私たちは『論理学研究』第二巻の第二の課題を〈認識体験一般の現象学的解明〉として規定することが

できるだろう。以下では、これら二重の課題に対する同書の分析を見ていきたい。

2.1 意義志向と意義充実化

まずは『論理学研究』第二巻第一研究における「表現」と「意義」に関する分析である。フッサールは表現を有意味な記号として定義する。言語は表現の典型例である。例えば私が植物事典を読んで、そこに〈菜の花は黄色い〉と書かれていたとする⁽⁴⁾。私はそこに書かれた黒い文字を見ているが、それを単にインクの染みとして捉えているのではなく、有意味な記号として捉え、何とかを理解している。つまり、ここには二つの作用体験がある。一つは「物理的表現現出」の作用であり、これは何らかの色や形態を持つ物理的対象を構成する作用である。そして、もう一つの作用が意義志向である。意義志向とは、第一研究でのフッサールの規定によれば、言語表現の「理解」のことに他ならない。そして、私たちはこの両作用の統一の中で、何らかの対象性（事態）へと関係しているとされる。

しかし、もし私が菜の花を実際に見たことはないとするれば、その意義志向における対象性への関係は空虚なものである。「対象に対する表現の関係が単なる意義志向にとどまる限り、その関係はまだ実現 (realisieren) されていない」(ibid., 44)。そして、「最初は空虚な意義志向が充実化されることによって、対象的關係が実現される」(ibid.)。こうして、フッサールは表現作用の分析を通じて、物理的表現現出、意義志向、意義充実化という三つの契機を取り出すのである。

2.2 充実化と代表象

第五研究・第六研究において、フッサールは意義志向や意義充実化の作用を志向的体験一般の構造のうちに位置づけることで、志向の充実化と呼ばれる事態の具体的な内実を明らかにしようと試みる。そこでは、志向の充実化は意義志向から意義充実化への「移行体験」(XIX/2, 582)であるといわれる。そして、この移行のプロセスにおいて両作用は「合致」して「認識統一」(ibid.)を形成し得るとされる。それが「合致」であるためには、両作用に共通の要素が存在していなければならない、そしてそれが「移行」体験であるためには、両作用の間には何らかの差異が存在していなければならない。

両作用の統一に必要な共通要素は、作用の「性質」と「質料」の統一体である「志向的本質」と呼ばれる。「性質」とは私たちの志向的体験を、表象、言表、疑問、願望等の作用として特徴付ける「作用の一般的性格」のことである。そして、「質料」とは「作用の中にあつて、対象への関係を初めて作用に付与するもの」(XIX/1, 429)であり、作用が対象を「どのようなものとして (als was)」捉えるのかもまた規定する、作用の意味的要素のことであ

る。つまり、私たちの意義志向と意義充実化が合致するためには、それぞれの作用で、同じ対象が同じ意味において（質料）、同じ作用性格のもとで（性質）、捉えられている必要がある。

しかし他方で、意義志向と意義充実化には重要な差異が存在している。「私たちは、記号的作用の中では《単に思考されて》いたに過ぎない同じ対象的なものが、直観の中ではどのように直観的に現前化されているのかを体験する」(XIX/2, 566)。意義志向と意義充実化の差異を形成するのは、対象の直観的な現前を実現するような作用の要素である。それでは、具体的にはこの要素はいかなるものなのか。

たとえば、私たちが実際に菜の花畑を前にして菜の花を知覚するとき、私たちは知覚対象やその諸部分に対応する感性的内容を、自らの作用体験のうちに見出すだろう。フッサールはこの場合の感性的内容を、対応する対象的諸契機の「呈示的内容」(ibid., 609)ないし「直観的代表」と呼ぶ。そして、この呈示的内容が作用の質料と結びつくことで、呈示的内容とそれに対応する対象的諸契機は直接的に関係付けられ、対象的諸契機はそれ自身として与えられて現出する。これに対して、私たちが書齋で植物事典を読んで、単に菜の花のことを思念しているときはどうだろうか。そのときにも確かに、何らかの感性的内容すなわち知覚しているインクの染みに対応する感覚は存在している。しかし、この感覚はそれに基づいて形成される意義志向の対象とは何の関わりも持たない(vgl. ibid., 619)。この何らかの形状を持つ黒の感覚は、菜の花と直接的に関係付けられるようなものではない。

こうして志向の充実化は、(A) 意義志向がその志向的本質の適合性によって意義充実化の作用と合致し、(B) 更に意義充実化作用のうちに見出される呈示的内容が作用の質量と結びついて対象との直接的な関係性を実現する、こととして特徴づけられた。(B) の考え方は「代表象 (Repräsentation)」理論と呼ばれ、『論理学研究』における認識論の中心概念となっている。次に、この代表象理論が知覚を離れて拡張される場面を見てみたい。

2.3 カテゴリー的直観

前節で私たちは知覚を意義充実化の作用として扱った。しかしフッサールによれば、意義充実化の作用として捉えられるのは、知覚を典型例とする「感性的直観」だけではない。

〈菜の花は黄色い〉という意義志向のうち、〈菜の花〉や〈黄色〉に関しては、通常の知覚によって充実化されるといえそうである⁽⁵⁾。しかし、〈～は…である (ist)〉という「命題形式そのものを構成する」ところの「カテゴリー的形式」(ibid., 658)は、一体何によって充実化されるのだろうか。istを一例とするようなカテゴリー的諸形式の客観的相関者は実在的な諸契機ではなく(ibid., 665ff.)、目で見たり、耳で聞いたりするなど感性的に知覚できる

ようなものではない。それゆえistのようなカテゴリー的形式を充実化するためには、感性的直観とは異なる「カテゴリー的直観」が必要であるとされる。

カテゴリー的直観（一般的にいえばカテゴリー的作用）なるものは、いかにして成立するのか。私たちの志向的体験は、質料の区分に応じて「命題的作用」と「名辞的作用」とに分類される。フッサールによれば、命題的作用は、それを基づける⁽⁶⁾名辞的作用の質料に「カテゴリー的形式化」を施すことによって成立するカテゴリー的作用である。具体的に、〈Aは α である（ α を持つ）〉という仕方ですべて「部分全体関係」を構成するカテゴリー的作用が、知覚に基づいて成立する様を見ていきたい。このカテゴリー的作用は、三段階のプロセスを経て成立する。第一に、全体Aを一挙に端的に知覚するような作用がある。第二に、全体知覚のうちで部分 α へと向かう部分志向が、固有の知覚作用として際立たせられる。そして、この第一の知覚作用と第二の知覚作用とは、両者が共通の代表（部分 α に対応する代表）を有していることによって統一される。第三に、この統一自身が代表象として機能することで、「Aは α を内蔵するものとして現出する」（*ibid.*, 682）。この第三の段階において、〈Aは α である（ α を持つ）〉という基づけられた命題的作用が形成される。

そして、このように知覚に基づいて成立するカテゴリー的作用を「カテゴリー的直観」と呼ぶことができる。「[部分全体関係という]このような典型的な事態を所与として構成する基づけられた諸作用を明示することと、ここで用いられた定言的言表の諸形式を（それらの直観的起源と十全的な充実化とに遡って）明晰にすることは、一つのことである」（*ibid.*, 681）。この場合のカテゴリー的直観とは、知覚に基づいて顕在的な総合（述定）を遂行することに他ならないといえるだろう⁽⁷⁾。

しかし、『論理学研究』の代表象理論の構造では、カテゴリー的直観が充実化作用であるためには、そのうちに直観的代表が含まれていなければならない。しかし、カテゴリー的直観における直観的代表とはいかなるものなのだろうか。フッサールが最終的に提出するのは、基づける作用の質料（全体Aの知覚作用の質料と部分 α の知覚作用の質料）を結合する「心的結合帯（psychishes Band）」（*ibid.*, 701）なるものである。フッサールがこの心的結合帯を見出す仕方は、感性的直観の直観的代表である感覚を見出す際と類比的である。その心的結合帯は「顕在的な（ここで《顕在的》とは本来的、直観的という意味だが）同一化作用や集合作用などにおいて体験されている」（*ibid.*, 702）といわれるのである。感性的直観において感覚が体験されるのと同様に、カテゴリー的直観においては心的結合帯が体験されている、というわけである。

2.4 問題点

本稿ではこれまで『論理学研究』における志向の充実化という問題設定の導入と、その具体的内実について分析してきた。以下で、そこに含まれる問題点を検討したい。

2.4.1 認識概念

本稿での特徴付けによれば『論理学研究』第二巻の課題は、第一に純粋論理学に登場する論理的諸概念の明晰判明化であり、第二に認識体験一般の現象学的解明であった。フッサールはこの二つの課題を密接に関連したものであると考え、両者を共に「志向の充実化」という枠組みによる分析を通じて解決しようとした。

前節では、知覚に基づいて顕在的な総合を遂行するというかたちの充実化（カテゴリー的直観）について検討したが、それと類比的な仕方、抽象（「理念的抽象」と呼ばれる）の顕在的遂行もまたカテゴリー的直観という身分を持つ（1の引用箇所を参照）。たとえば、〈菜の花は黄色い〉という意義志向の充実化においては、その命題的意義の相関者として〈菜の花は黄色い〉という「具体的に規定された事態」(ibid., 676)が構成される。この具体的に構成された事態に対して、更に「理念的抽象」が顕在的に行われることで、その具体的事態を構成する個体的要素と感性的要素は共に捨象されて、「事態」という「純粋なカテゴリー的諸概念」が得られる(vgl. ibid., 712f.)。このように、総合や抽象⁸⁾の顕在的な遂行としてのカテゴリー的直観が数段階にわたって行われることで、「純粋なカテゴリー的諸概念」が明晰判明に獲得され、「認識」されることになるのである。このように、『論理学研究』におけるカテゴリー的直観による充実化の議論は、論理的諸概念の明晰判明化という第一の課題と密接に結びついていた。

しかし、〈S ist P〉というかたちで表現される命題的意義志向の充実化に関しては、フッサール自身も指摘するように、それがまさに「真理」を目指している(vgl. ibid., 654ff.)という固有な意味での「認識」であることへの考慮が必要である。『論理学研究』の第二の課題に関わるこの点については、同書における議論は不十分なものであった。フッサールは1908年夏学期の講義の中で、『論理学研究』において意義志向が充実化されて成立する「充実化統一」を「認識統一」と表示したこと（本稿 2.2 を参照）は「思慮のないことであった」と述べる(vgl. XXVI, 16)。フッサールによれば、ここでは二つの「充実化」が区別されなければならなかった。充実化は空虚な表象を直観充実によって「充たすこと (Ausfüllung)」として捉えられる一方で、他方では信念の「確証」ないし「裏付け」として捉えられる(ibid.)。このように志向の充実化による認識を〈信念の確証〉として捉える見方は、『論理学研究』以降の分析に持ち越されることになる。本稿 3.3 で検討を行いたい。

2.4.2 充実概念

更なる問題点はカテゴリー的代表象理論にある。フッサールは1920年に書かれた『論理学研究』第二版への序文において、カテゴリー的代表象についての理論をもはや是認していないと述べる(XIX/2, 535)。フッサール自身はその理由について何も明示的に述べてはいないが、感性的直観である知覚とのアナロジーによって、カテゴリー的代表としての心的結合帯なるものを見出す仕方には、やはり問題があったように思われる。いずれにせよ、このフッサールの言葉を真剣に受け取るならば、私たちはカテゴリー的代表象に代わる新たな充実化の理論を探し求めなければならない。とりわけistを含む命題的意義志向の充実化は、現象学的認識論にとって必須の課題である。

この新たな理論は充実概念の展開によって行われる。『論理学研究』のフッサールは知覚における充実をもっぱら直観的代表すなわち感覚のうちに見出していた。フッサールは感覚を孤立して考察するのではなく、統握との連関において感覚が果たす機能の面から充実概念を捉えていた(vgl. *ibid.*, 616)という点は十分に考慮されなければならないとしても、やはり『論理学研究』における充実化は、感覚という体験の实的契機と密接に結びついた仕方でも考察されていた。この『論理学研究』における感覚に偏重した充実概念は、『イデーニ I』において新たな仕方で捉え直される。この点については、本稿 3.3 で確認する。

3. 『イデーニ I』における現象学的認識論の構造

フッサールは『イデーニ I』において「現象学的還元」と呼ばれる方法を展開した。フッサールは常に既に成立している志向性による対象的關係である「定立」を素朴に遂行するのを留保し、意識の本質構造との連関においてこの定立自身を考察の対象とする。この定立が空虚な思いなしに過ぎないのか、それとも正しい認識であるのかを、志向的意識の構造分析によって明らかにするのが、『イデーニ I』の現象学的認識論である。以下では、ノエシスとノエマという相関概念を用いて規定されるこの志向的意識の構造を確認し、『論理学研究』に見られた問題点に関するその後の展開について検討したい。

3.1 ノエシスとノエマ

フッサールは現象学的還元によって到達される「純粹意識」の構造を、ノエシスとノエマという相関的概念を用いて分析する。本質において捉えられた私たちの体験流としての純粹意識の实的構成要素は、感覚内容とそれを「生化 (beseelen)」して対象を現出させる「意味付与 (Sinngebung)」の層とに区分される(vgl. III/1, 192)。フッサールは後者の意味付与の層をノエシスと名付ける。このノエシスの意味付与の働きによって、それ自身のうち

に志向性を持たない感覚から、具体的な志向的体験が成立してくることになる。そして、このノエシスの志向的相関者が本稿 1 でも触れたノエマである。

『論理学研究』における作用の性質や質料の分析に見られたように、このノエシスとノエマもまた幾つかの構成要素に分析される。本稿で特に重要なノエシス-ノエマの構成要素は、信念性格（定立性格）-存在性格である。私たちは〈確実だ〉、〈ありそうだ〉、〈疑わしい〉など、様々な信念を伴う仕方でも意味付与作用を遂行し、定立を行っている。そしてこのノエシス的契機の相関者として、志向的对象であるノエマの側では、〈確実に存在する〉、〈蓋然的に存在する〉、〈疑わしく存在する〉といった様相的な性格が見出される。これは『論理学研究』における作用の性質の概念を発展させたものであるが、注目すべきは『イデー I』においてそれが信念性格として際立たせられていることである。

3.2 理性の現象学

現象学的還元によって、対象を現実的なものとして素朴に定立することは留保されている。しかし、このことは現象学的認識論が対象の現実性について語り得ないということの意味しない。むしろ現象学は、現象学的還元によって得られた純粋意識の本質構造としてのノエシスとノエマの相関関係がいかなる特徴を示すときに対象が現実的なものと言われ得るのか、という問いのかたちで、現実性の問題を分析の枠内に取り戻す。これが、ノエマの現実性ないし真理性を問う「理性による正当性の判決」(ibid., 312)の問題圏すなわち「理性の現象学」である。そして、この理性の現象学においてとりわけ重要な契機となってくるのが、前節で述べた信念性格（定立性格）—存在性格である。フッサールによれば、「真に存在する対象」と「理性的に定立され得る対象」とは等価的な相関者である⁹⁾。

ところで、ある特有の理性性格というものが、一つの卓越性として定立性格に固有のものとなり得るのである。この卓越性は、その定立性格がただ単に一般にある意味ではなくて、充実化された原本的に与える意味に基づいた定立である場合、まさに本質的にその場合にかつまたその場合にのみ、その定立性格に帰属する。(ibid., 315f.)

こうして、理性意識の成立要件として充実化という契機が登場する。ここでいわれる「充実化された原本的に与える意味」とは私たちが眼前にある事物を知覚するときを持つ、事物の有体的な (leibhaft) 現出のことに他ならない。そして、このように私たちが直観的充実を備えた現出を有するとき、そのノエマに対する定立はその現出によって「《理性的に動機付けられて》いる」(ibid., 316)といわれる。「定立は原本的な所与性のうちに自らの根源

的な正当性の根拠を持っている」(ibid.)。

こうして理性意識の成立過程が明らかにされた。まず私たちは、対象を有体的に与える原本的意識である知覚において、直観的充実を備えた現出を持つ。この現出はそれがまさに充実を備えているがゆえに私たちの定立を理性的に動機付け、その定立には理性性格が帰属することになる。こうして、「理性定立とそれを本質的に動機付けるものとの統一」が成立し、それが「明証性」と呼ばれることになる(ibid., 316)。そして、そのとき対象は現実存在するものであるといわれ得るのである。

3.3 思想展開

2.4.1 で述べたように『論理学研究』においてフッサールは〈信念の確証〉という意味での認識概念を際立たせることができなかつた。1908年夏学期の講義において、その点に対する反省がなされていたことは、既に本稿で確認した通りである。そして、『イデーニ I』ではノエシスの信念性格に際立って重要な役割が与えられ、志向の信念としての性格が強調された。それでは、充実化に関してはどうだろうか。フッサールは次のように述べる。

例えば、ある明証的な作用とある非明証的な作用とが合致するということがあり得る。その際、後者から前者への移行において、前者は証示するものという性格を受け取り、後者は証示されるものという性格を受け取る。一方の洞察的な定立は、他方の非洞察的な定立に対して、《確証する》ものとして機能しているのである。(ibid., 324)

『イデーニ I』において、充実を欠いた空虚な志向とは「非明証的作用」ということに等しく、その志向を充実化する作用は充実を伴った「明証的作用」である。そしてここでは、志向の充実化（非明証的作用から明証的作用への移行による両者の合致）ということで、『論理学研究』のように単なる図式的な合致関係が問題となっているのではない。両者の間では、信念を確証するという際立って認識論的な事態が主題となっている。『イデーニ I』における志向の充実化は「定立的諸性格に特有に関係する正当化 (Berechtigung) および裏付け (Bekräftigung)」(ibid., 334) と言い換えられる。志向の充実化としての認識は、信念の確証（ないし正当化）として明確に規定されるのである。ここでは、二つの志向的作用の存在論的關係としての基づけ関係ではなく、認識論的關係に焦点が当てられている。

続いて 2.4.2 で触れた充実概念について検討したい。『論理学研究』において充実は体験の実的な契機である感覚に偏重したものとして捉えられていた。しかし『イデーニ I』において、充実概念はノエマ的に捉え直されている。私たちはもはや、カテゴリー的作用の

場合に、感覚のような体験の実的な契機を充実の所在として探し求める必要はない。

更に前節で述べたように『イデーニ I』の充実概念には、理性定立を本質的に動機付けるものという新たな規定が与えられている。『イデーニ I』の充実は一面においては対象の感性的現れに結びついたものでありながら、他面においては定立に正当性を付与するものとして、一種の規範的役割を担っている。ここでいわれる規範とはノエシスとノエマの相関関係を支配する本質法則のことに他ならない(vgl. *ibid.*, 333)。ここで問題になっているのは、単に感覚やあるいは感性的現れが見て取られるという偶然的な事実ではなく、充実によって理性定立が成立し、その理性定立が他方の非理性的定立を正当化するものとして働くということが、意識の「本質法則」によって規制された事態であるという洞察である(vgl. *ibid.*, 334)。このように、理性や正当性といった規範的相貌のもとで捉え直されたということが、『イデーニ I』の充実概念の際立った特徴である。以上で、『論理学研究』において見られた認識概念と充実概念の問題が、『イデーニ I』において一定の解決を見ることが確認された。

おわりに

本稿では、志向の充実化という枠組みを手引きにして、現象学的認識論の変遷を確認してきた。その結果、『論理学研究』において見られた認識概念や充実概念の不備が『イデーニ I』においては解決され、現象学的認識論がノエマの現実性ないし真理性を問う「理性の現象学」として展開されることを理解した。以上のことから、本稿 I で見た現象学の二つの道の問題について、以下のように言えるのではないか。つまり、現象学において認識論が中心的課題の一つである限り、また認識が志向の充実化として定式化される限り、そして私たちの知識の多くが言語によって表現されるものである限り、言語的意義を探求する意味理論と、その充実化を問う認識論とは必然的に交錯するはずである。本稿では『論理学研究』におけるカテゴリー的代表象の理論（すなわち命題的意義志向の充実化の理論）が持つ困難が『イデーニ I』において一定の解決を見ることが確認することで、その交錯の場面の基礎構造の一端を示すことを試みた。しかし、もちろんこれではまだ現象学の二つの道を統合的に理解したことにはならない。その統合的理解は、意味や明証性の起源を「前述定的」次元に遡って問う、後期の発生的現象学の視座をもまた考慮に入れて取り組まれるべき課題であろう。

註

(1) フッサール著作集 *Husserliana* からの引用に際しては、巻数をローマ数字で表し、ページ数をアラビア数字で付す。原文のゲシュペルトの箇所には傍点を付し、引用符は《 》で表す。[] は引用者による補足

である。邦訳があるものについてはそれを参考としつつ、適宜変更を行った。なお『論理学研究』からの引用は、特に断らない限り、初版に従う。

(2) 本稿ではAnschauungとIntuitionを共に「直観」と訳す。

(3) 本稿ではフッサールのBedeutungには「意義」、Sinnには「意味」という訳語を当てる（ただし、本稿1で触れたBedeutungslehreについては意味理論と訳す）。フッサールは『論理学研究』においては両者を同義のものとして扱う(XIX/1, 58)が、『イデー I』においては、特に言語的な表現に関わる場合にBedeutungを用いるとする(III/1, 285)。これはフレーゲのSinnとBedeutungの用法とは異なるものである。

(4) この〈菜の花は黄色い〉という例は、フッサール自身が用いた例ではない。

(5) 厳密に言えば、ここには名辞それ自身のうちに含まれるカテゴリー的形式（例えばdasやeinなどによって表される形式）の問題がある(vgl. XIX/2, 658)。本稿では、この問題を議論に組み入れることはできなかった。

(6) 「基づけ (Fundierung)」とは一種の存在論的關係のことを指している。「定義。——ある α そのものが（したがって法的に）それをある μ と連繋するある包括的統一体の中でのみ実在し得る場合、我々は、ある α そのものはある μ による基づけを必要とすると言ひ、またある α そのものは μ による補足を必要とすると言ふ」(XIX/1, 267)。

(7) トゥーゲントハットによるカテゴリー的直観の解釈である。「表意的なカテゴリー的作用が直観的なカテゴリー的作用において充実化されるのは、表意的なカテゴリー的作用が思念する綜合が顕在的 (aktuell) に遂行されるときである」(Tugendhat, 1970, p. 122)。

(8) ベルはカテゴリー的直観を「抽象」と「綜合」とに大別している(vgl. Bell, 1991, p. 109)。

(9) 更には「根源的で完全な理性定立において定立され得る対象」(III/1, 329)と「真に存在する対象」とが等価的な相関者であるといわれる。これら「根源性」と「完全性」（「十全性 (Adäquatheit)」）という二つの要件のうち、本稿では前者の考察のみを行う。

文献

Bell, D. (1991). *Husserl*, London: Routledge.

Bernet, R. (1990). 'Husserl's Begriff des Noema', in Ijsseling (Hrsg.), *Husserl-Ausgabe und Husserl-Forschung*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Follesdal, D. (1969). 'Husserl's Notion of Noema', *The Journal of Philosophy*, 66, 680-687.

Husserl, E. (1950ff). *Edmund Husserl Gesammelte Werke*, Den Haag/Dortrecht: Martinus Nijhoff/ Kluwer Academic Publishers.

——Bd. III/1 (1976). *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologische Philosophie. Erstes Buch, Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*, Den Haag: Martinus Nijhoff. (1979, 渡辺二郎訳, 『イデー I - I』, みすず書房。) (1984, 渡辺二郎訳, 『イデー I - II』, みすず書房。)

——Bd. XVIII (1975). *Logische Untersuchungen. Erster Band, Prolegomena zur reinen Logik*, Den Haag: Martinus Nijhoff. (1968, 立松弘孝訳, 『論理学研究 1』, みすず書房。)

——Bd. XIX/1 (1984). *Logische Untersuchungen. Zweiter Band. Erster Teil, Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, Den Haag: Martinus Nijhoff. (1970, 立松弘孝・松井良和・赤松宏共訳, 『論理学研究 2』, みすず書房。)(1974, 立松弘孝・松井良和共訳, 『論理学研究 3』, みすず書房。)

——Bd. XIX/2 (1984). *Logische Untersuchungen. Zweiter Band. Zweiter Teil, Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, Den Haag: Martinus Nijhoff. (1976, 立松弘孝訳, 『論理学研究 4』, みすず書房。)

——Bd. XXVI (1987). *Vorlesungen über Bedeutungslehre. Sommersemester 1908*, Dordrecht: Martinus Nijhoff.

Sokolowski, R. (1987). 'Husserl and Frege', *The Journal of Philosophy*, 84, 521-528.

Tugendhat, E. (1970). *Der Wahrheitsbegriff bei Husserl und Heidegger*, Berlin: Walter de Gruyter & Co.